

2021 ぎふ平和のつどい

ニュース 第2号

2021 年 6 月発行

「2021 ぎふ平和のつどい」

実行委員会 編集

(委員長:平方浩介)

事務局:「岐阜・九条の会」

(岐阜県教育会館3F 304号)

今年は昨年休止の企画を 11 月 3 日(祝)に開催します！

日本国憲法公布 75 周年記念日の今秋 11 月 3 日、今年の「ぎふ平和のつどい」を行います。内容は、昨年予定した企画が新型コロナ感染予防のために休止したため、出演者の承諾を得て、あらためて開催することになりました。

コロナ対策・ワクチン接種で重大な失策を重ねている政府は、「いのちより経済・五輪」を強行し、さらに憲法の改悪も画策しています。世界の平和と人権を心から願う私たちは、そのような方向を止めさせるために、「ぎふ平和のつどい」を成功させたいと思います。ご協力よろしくお願いします。

昨年の「ニュース No.1」で紹介しましたように、記念講演者は、著名なジャーナリスト **斎藤貴男さん** で、「アフターコロナの平和について考える」と題して講演して頂きます。さらに、著名なショパン演奏家で、「指紋押捺拒否」裁判を闘ってこられた **崔善愛(チェソンエ)さん** に、お話を交えてのピアノ演奏をして頂きます。大変豪華な内容で、お二人といっしょに、2年にわたるコロナ危機問題を通して、あらためて平和・人権についていっしょに考えたいと思います。

「ぎふ平和のつどい実行委員会」 連絡先:090-7917-9602(吉田)

*なお、今回もコロナ流行が終息する見通しが明確でないと、11月の開催が危ぶまれます。

*実行委員会としては、8月中に開催可否の最終判断をし、皆さんにお知らせします。

★ 崔 善愛(チェソンエ)さん プロフィール ★



1959年兵庫県生まれ、北九州市出身。ピアニスト。21歳で外国人登録証の指紋押捺拒否、それにより米国留学の際、再入国不許可となり、特別永住資格を剥奪された。その後様々な裁判経過を経て、1999年原状回復した。「ショパンの手紙」などのコンサート活動とともに、現在、週刊『金曜日』の編集委員として、人権問題を中心に健筆を振っている。主な著書に『『自分の国』を問いつづけて』(岩波ブックレット)、『父とショパン』(影書房)、『ショパン〜花束の中に隠された大砲』(岩波ジュニア新書)など。CDに『ZAL』(ショパン作品集)などがある。

この秋にぜひ 崔善愛さんに出会って欲しい

崔善愛さんと初めて出会ったのは、神奈川県の子ども劇場の会議だった。会議後の交流会で朝鮮人強制連行の話題になり、話は次から次へと発展した。それは、幼い頃、北海道北部の朱鞠内湖ダム建設における強制労働の現場を目撃していた我が母の話につながり、後日、彼女は母に会いに行くことになった。行先は母が一人住む北海道の滝川市。その日同席してくれたのが知人、北海道の地で強制労働者の埋もれた遺骨を掘り起こし、韓国に返還する活動をされている殿平善彦氏。ここから深く濃いつながりが始まったと思う。

21歳で指紋押捺拒否をして以来、いや彼女が生まれてからずっと、彼女は生きることそのものが闘いだったと思う。それは今も変わらない。2019年10月22日「風の子ひろば」主催で、「平和と人権」崔善愛ピアノコンサートを開催した。今でもその時の感動は忘れられない。彼女が奏でるピアノの美しさと力強さは、彼女が生きてきた人生の静かな荒々しさを伝え、歴史の真実こそ次の時代を創造する力になるという核心を訴えかけていた。

今秋の取り組みで多くの方に是非とも彼女に出会って欲しいと願う。人類の未来が明るく輝くために。

(西川典之:「劇団風の子中部」代表)

崔さんの演奏とトークを心待ちにしています

週刊『金曜日』の最初のページは、編集委員が交代で書くコラム「風速計」。いつも崔善愛さんの文章を心待ちにしている。最近では、女性蔑視のルーツは天皇制にあると鋭く突いた文、ビキニで核被爆した大石又七さんの死に寄せて書いた怒りの文。常に弱い立場の人々の人権を慮り、尊厳を踏みにじる者たちを許さないという視点が貫かれていて、深く共感すると同時に、この日本という国家を恥じ入り、苦しくなる。

存在を消しながら我慢して生きる自分と訣別し、自分の生き方を獲得するための道を選び、指紋押捺を拒否したのは崔さんが21歳の時。ありったけの勇気を奮い立たせ、震える心で書き上げたであろう裁判での意見陳述書を読んだ時、涙が溢れ政治を変えたいと心底思った。差別される当事者として不条理を生き抜く中で、研ぎ澄まされた感性からほとばしる言葉とピアノの音色。

侵略を拒否し平和を求めるショパンの魂と崔さんの魂が重なり合い、響き合う瞬間を想像するだけで今から胸がいっぱいです。
(青木真理：「岐阜・九条の会」)

★ 斎藤貴男さん(さいとうたかお)さん プロフィール ★



1958年東京生まれ。早稲田大学商学部卒業。英国バーミンガム大学大学院修了(国際学MA)。「プレジデント」編集部、「週刊文春」記者などを経てフリーに。

主な著書に、『機会不平等』(岩波現代文庫)、『ルポ改憲潮流』(岩波新書)、『ジャーナリストという仕事』(岩波ジュニア新書)、『「マイナンバー」が日本を壊す』(集英社インターナショナル)、『戦争経済大国』(河出書房新社)、『決定版 消費税のカラクリ』(ちくま文庫)、など多数。近著に、『奢る権力 煽るメディア』(新日本出版社)、初めての児童文学書『いちばんたいせつなもの』(新日本出版社)がある。

現実を深く広く深くとらえる『驕る権力 煽るメディア』

本書は、斎藤貴男さんが2015年から2019年はじめまでに書いた100編近くのコラムが収録されている。時々の時事問題が取り上げられているわけだが、それらの内容をひとまとめにして記すと、書名のとおり「驕る権力 煽るメディア」ということになるだろう。それにしても、この4、5年の間に「開いた口が塞がらないような」出来事が、これほどまでに多くあったことにビックリする。

「はじめに」で、・・・まずは具体的な現実を深く、広く認識しよう。僭越ながら、できればその際、個々の事例を读者ご自身の仕事や暮らしに引き付けて理解し、自問自答・思索してみる努力をしてほしい・・・など、读者へのダイレクトなメッセージが書かれている。

この中には、2018年の入国管理法改正の問題が取り上げられている。このとき、「改正」入管法は強行採決によって可決・成立させられた。だが、今回(2021.5)は、市民と野党が力を合わせて行動した結果、今国会では断念に追い込むことができた。市民の中で「具体的な現実を深く、広く認識し」行動を起こそうとする動きは広がってきているととらえたい。ぜひ多くの人に読んでいただきたいし、この秋じかに斎藤さんの話が聞けるのを楽しみにしている。
(岩佐 孝：「さぎ山・ときわ9条の会」)

『いちばんたいせつなもの』・・・読みやすく爽やか、かつ怒り

これは秋の講演者である斎藤貴男さんの実体験に基づいた、初めての児童文学書です。

物語は、「健康学園」(身体が弱い子どものための小学校)で繰り広げられる子どもたちの成長の様子が、主人公テツオの言葉で語られます。ある日テツオは自分が海岸で苦勞して拾った貝「ヒガイ」を、あこがれの先輩にきれいな貝「ホシダカラ」と取り換えっこしようと言われ、それに応じてしまう。しかしうれいはずなのになぜか悲しくてしかたがない。そんなテツオに寮の先生は「自分にとって何が大切かわからないから」と言う。「自分にとって一番大切なもの」？ よくわからずまわりの子どもたちに聞いてみる。「ポケモン」「漫画」「ドローン」・・・そのうちに「いのち」という答えに出会う。「死んで花実が咲くものか」という言葉があることも知る。テツオはなぜ自分が貝殻の交換で涙が出たかにも気づいていく・・・。

理屈っぽくなく、読みやすく、爽やか。しかしその中に、ゆたかな自然と交友関係によって成長していける子どもたちから、そんな環境や希望を奪っている今の社会・政治に対する怒りを感じ、著者がこの児童文学書を書いた理由がわかったような気がした。いちばんたいせつなものは何か・・・コロナ禍の中で世の矛盾が明らかになった今こそ考えたい命題である。
(座馬惇子：「長良、岩野田・九条の会」)